

特集

「貧困」って何だ!?

餓死。孤独死。痛ましい事件が絶えない。孤独死は日常化し、都内だけでも平均すると、毎日約20人の死亡¹⁾が確認されている。大阪、埼玉、立川等で母子や姉妹が家族ぐるみで餓死するという事件が起きている。

きつと、読者も雑誌やニュース等で耳にし、そのたび「何か手を打てなかったのか」「行政は何をしていたのか」と憤りを感じたり、やり切れなさを覚えているのではないか。

一方、制度政策でも動きが出てきている。平成25年1月には社会保障審議会に設置された「生活困窮者の生活支援の在り方に関する特別部会」による報告書が発出され、それに伴い新たな生活困窮者制度（生活困窮者自立支援法）が構築されつつある。また、平成25年6月には、子どもの貧困の解消や教育の機会均等、次世代への貧困の連鎖の防止等を盛り込んだ、子どもの貧困対策法が制定された。

しかし、これら制度における「貧困」はどうやら経済的に困窮している状態のみを意味するようだ。生活困窮者自立支援法（案）では、その対象を「現に経済的に困窮し、最低限度の生活を維持することができなくなるおそれのある者」とされ、子どもの貧困対策法でも、経済的な指標である「子どもの貧困率」をベースに対策が進められる。

しかし、いま一度「貧困」とは一体何であるかを考える必要があるのではないか。餓死や孤独死の問題はもはや特別な事例ではなく、私たちの暮らしのすぐそばに横たわっている。果たして「貧困」問題は、経済的な問題だけ対応すれば事足りる問題なのか。特集で私たちが問いたいのは、このことである。そしてこの問いは、私たち市民は、「貧困」問題に関わることが出来ないのか、ということと、実は表裏一体である。

現代における「貧困」が持つ意味とは何か。経済的な問題だけに矮小化されない「貧困」を考え直すことは、私たちの生き方を問いなおすことにもなる。

今回、ボランティアフォーラム2013²⁾で、貧困・教育・外国籍・環境などを中心に考える「生活・くらし」カテゴリーに所属していたスーブの会³⁾の後藤さん、しづやボランティアセンターの吉良さん、日野市ボランティア・センターの宮崎さんにご協力頂き、特集を企画した。

取材では、この3人にもできるだけ同行して頂き、「HIINO飛ぶ教室」と民生委員（ともに日野市）、「Necocoカフェ」（新宿区）、「多文化まちづくり工房」（横浜市・大和市）を訪ねた。それを受け、座談会を開催した。

座談会 「貧困」って何だ!?

スープの会 後藤浩二

しぶやボランティアセンター 吉良裕美子

日野市ボランティア・センター 宮崎雅也



後藤 最近、「貧困」とか「生活困窮」という言葉がよく使われますが、私としては、非常に不全感を覚えています。「貧困」と言われても、その人の生活状況が全く見えなからです。「貧困」対策と言われても、何をどのようにすべきなのかが全く分からないのです。

私たちは、もっと具体的な生活場面で「貧困」問題を考えていく必要があるのではないかと思っています。

HINO 飛ぶ教室（14ページ掲載）には、私も取材に同行しました。飛ぶ教室を主宰する滝口さんは、教室に通う子どもや若者に対して、様々な支援活動を次から次に展開しておられました。それは、子どもや若者の具体的な生活場面に関わっているからだと思います。取材の中で、「貧困」という言葉がほとんど出てこない代わりに、「コミュニケーションを取ることが困難」とか、「一

緒に夕飯を食べる人がいなくて淋しい」という、本人が感じている具体的な困難の事例がいくつも出てきます。これは「貧困」を捉える上で、非常に象徴的なことだったと感じています。

——よく人間の3大欲求で、「食欲」「睡眠欲」「性欲」があると言われていますが、亡くなられた岡村重夫先生⁴がそれらの欲求を深く考えていても人間の本当の理解にはつながらない、もっと日常生活の中で人間を捉えていく必要がある、とおっしゃっていたことを思い出しました。「食欲」ではなく、例えば「ケーキが食べたい」という、個々の生活に即した言葉を聞いていく必要性を指していたのだと思います。「貧困」問題と似ていますね。

吉良 以前、児童養護施設をもうすぐ退所する